

【 表現内容 B：表現材料】

失敗から生まれたポストイット（付箋紙）

- 目の前の材料や道具と向き合うことから -

毎日というほどお世話になっているポストイットである。

現在では 100 か国以上で販売され、さまざまなバリエーションが
つくられている。先端に色が付いたポストイットは日本の消費者の
アイデアだということである。ちょっとしたメモ書きや、授業で
の子どもたち同士の意見やアイデア、感想交換などにも利用して
いる便利なものである。

このポストイットは失敗から生まれたものであるとのことだ。
1968 年、アメリカの科学メーカーの研究者らが強力な接着剤の開発
中に、たまたま逆に非常に弱い接着剤をつくり出してしまったとい
う。これを本のしおりに応用できないかと思いついたのである。

このエピソードは偶然から大発明を生む「セレンディピティ（遇
察力）」の典型例として知られている。大発明や発見は、考えてみれ
ば 1 日や 2 日の研究や、やろうと思ってつくられるものは少ない。
どのような研究者や偉人のエピソードを見ても、偶然性からの発見
や副産物的に出てきたものが多い。

さて、携帯電話一つあれば何も困らない情報時代。過剰すぎて完
全に自分たちの生活を受け身に設定してしまい、創造性に欠ける毎
日にしばられてはいないだろうか。

目の前の材料や道具と向き合うことで自分自身を見つめ、こだわ
りが生まれ、その子なりの人生観、生きる力が育まれていく造形活
動。一片の木の塊から、あるいは真っ白な 1 枚の紙から何が生まれ
てくるだろう。

授業では、子どもたちに一つの材料にじっくり時間をかけること
で、たくさんの失敗を体験させたい。その中から子どもたちの中に
さまざまなアイデアが生まれ、世紀の大発見が生まれてくるのを
期待するのをもまた楽しい。

なかみねもりゆき
(仲嶺盛之：筑波大学附属小学校教諭)